

サモサを売る先生

永原 陽子

南アフリカのケープタウン。この国のすべての都市と同様、ここでもタウンシップ(旧黒人居住区)は、相変わらず、市内とは隔絶した世界である。アパルトヘイト崩壊により、人々の居住や移動が自由になったとはいえ、経済力のない人々が、華やかな都市の中心部から遠く離れた砂地に肩を寄せ合って生きていることに変わりはない。

ハイデフェルトもそのような地域の一つである。アパルトヘイト時代には「カラード」すなわち「黒人でも白人でもない」とされた人々(いわゆる「混血」のほか、様々なアジア系の出自の人を含む)の居住地に指定されていた。教師である友人 Z さんの案内で「ハイデフェルト・ハイスクール」を訪れたのは、2001年2月のことである。

茫漠としかいいようのない広い校庭のかなたには、ケープタウンの象徴、テーブルマウンテンが遠望される。錆びたサッカーゴールが唯一の「設備」である。教室の中も同様。文字どおり、何も無い。あるのは机と椅子だけだが、それも数は足りず、床に坐る生徒や二人で一つの椅子に腰掛ける生徒たちがいる。

Z さんをはじめ、この学校の先生たちはほとんどがカラードである。しかし、生徒の方はそうではない。7年あまり前までのアパルトヘイト法の生きていた時代には、カラード地区にあるこの学校にはカラードの生徒しかいなかった。しかし、わずか数年の間に状況はすっかり変わり、今ではアフリカ人(黒人)とカラードの生徒が半々になった。「私たちも生徒たちも、もう最近では黒人だとかカラードだ、なんてこと考えたこともないわよ。そんな区別をしていたなんて本当に馬鹿らしいことだったわね。」と Z さんは笑いながら言う。

1, 2 時間目、歴史の授業を見学。ロシア革命を熱っぽく語る先生の様子に、妙な感動を覚えた。しかし、驚くのはそのあとだ。授業が終わり、長めの休み時間になった途端、先生たちは突如、忙しそうに立ち回り始めた。何しろ、この学校には、教師以外に事務職員は一人もいない。授業料の徴集から校舎の修繕まで、すべて教師たちの仕事なのである。交代で「タックショップ」の番もしなくてはならない。飲み物やスナックなどを仕入れ、生徒たちに売って学校の資金源とするのである。

しかし、苦しいのは学校の財政ばかりでなく、教師たちの懐でもある。Z さんの同僚の I 先生は、手作りのサモサ(この種の東南アジア出自の食べ物、あるいは広く文化全般は、ケープタウンでは「マレー風」と呼ばれ、都市文化の不可欠の要素をなしている)を持ってきて、ちゃっかりと売り込んでいる。手伝う生徒に「今日はいくら売れた?」と聞く先生もさばさばとしたものだ。

南アフリカの学校制度は、この間、大きく変わった。学校ごとの、教師と親の自治組織(いわば PTA)の決定権が大きくなった。アパルトヘイト時代のような、国家による上からの統制がなくなった一方で、それは新しい状況の下で人種主義を再生産する仕掛けともなっている。裕福な家庭の子弟が集まる学校では、高い授業料をとり、設備を整え、優秀なスタッフをたくさん雇うことができるが、タウンシップの学校ではそのようなことは望むべくもないからである。かくして、たくましい教師たちの出番となる。



イニシエーション期間中の少年と担任の先生。制服着用が厳しく定められている学校に、このような姿で登校することが認められるのが、新しい南アフリカの「和解」の精神の表われかもしれない。